

2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	助教	丹下 悠史
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻 博士課程前期課程 修了	修士 (教育学)	教育方法学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

真に信頼して事を任せうる人材の育成、「真面目」な人間の育成を包括的な目標として、「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事（つか）うるの職分なり」の精神にもとづき、教育活動を通して各々が目指す将来像を共に追究していくことを目指す。

とりわけ中高教職課程の指導について、教科の指導力や基礎学力の育成、モチベーションの維持向上等、学生への万全なサポートに努めたい。

(計画)

学生が納得感や達成感を得ながら資質・能力を高めていけるよう、具体的には以下の点に取り組む。

- ・講義科目では、学生一人ひとりが自らを学習の主体として意識できるよう、課題へのフィードバックや学習内容の外化（発表、グループワーク、課題作成）を授業の各回に取り入れる。
- ・演習科目では、少人数制のメリットを生かし、個々人の経験や知識に応じた課題を設定する。課題内容は、卒業後の進路を見据えた基礎的な知的・社会的スキルの伸張をねらったものとする。

○担当科目（前期・後期）

（前期）教育学概論、教育経営論、教育方法論、道德教育の理論と方法、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）教職概論、教育経営論演習、道德教育論、教職実践演習（中・高）、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

- ・「教育方法論」「道德教育の理論と方法」における模擬授業の実施・記録作成・分析
- ・「教職実践演習」における東邦高等学校の保健体育授業の観察・分析

○作成した教科書・教材

- ・教職科目における授業の準備・実施・分析の補助教材多数
- ・演習科目における個人研究の調査・論文執筆の補助教材多数

○自己評価

計画に記した通り「学生一人ひとりが自らを学習の主体として意識できる」ことを目的として上記の取り組みを行った。科目の特質を問わず、個別のフィードバックは学生が前向きに学習する上で効果的であると思われる。学生による授業評価も前年度に比べおおむね改善した。今後は Google クラウド等 ICT ツールを駆使することで、準備を効率化し学生の ICT スキルを向上させることが課題である。

II 研究活動

○研究課題

「小中学校における道徳授業の分析・評価手法の開発」

○目標・計画

(目標)

小学校および中学校の道徳授業における子どもの発言から、そこに介在する判断の特質や相互の影響関係を可視化する手法を開発する。また、開発された手法を道徳以外の授業に適用する場合の可否や方法を検討する。

(計画)

上記の研究について、年度前半は既存の事例にもとづく手法開発、後半は各所属学会および東邦学誌を通じた成果報告に充てたい。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(学術論文)

- ・丹下悠史（2018）「道徳教育における読み物資料のモデルとしての機能」『平成28年度 大学院生の教科書研究論文助成金論文集』公益財団法人教科書研究センター。
- ・丹下悠史（2017）「道徳教育における教師の授業洞察力を高める研修方法の開発」『東邦学誌』46(2), 159-168.
- ・小出禎子・丹下悠史（2017）「小中連携教育における学校経営--校長から見た「子どもの学び」と「教師の学習」に関する意義と課題を中心に」『東邦学誌』46(1), 17-27.
- ・柴田好章・須田昂宏・丹下悠史・中道豊彦・水野正朗・深谷久美・野村昂平・胡田裕教・坂本篤史（2016）「授業記録にもとづく授業分析のための手法に関する試験的研究」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』62(2), pp. 87-106.
- ・丹下悠史（2014）「問題解決学習の道徳教育としての意義と課題」名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻，修士学位論文。
- ・柴田好章・中道豊彦・水野正朗・副島孝・坂本篤史・中島淑子・須田昂宏・埜寄志保・丹下悠史・付洪雪・堀田貴之・横山真理・近藤茂明・深谷久美・タン シャーリー・野村昂平・満田清恵・キララン チワリ（2014）「中間項による授業の記述とデータ解析に関わる諸問題の検討」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』60(2), pp. 105-128.
- ・的場正美・柴田好章・水野正朗・中島淑子・堀田貴之・近藤茂明・福村美希・新谷裕・須田昂宏・埜寄志保・丹下悠史・付洪雪・伊倉剛（2012）「子どもの発言に内在する授業諸要因の抽出に関する事例研究」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』59(1), pp. 121-149.

(学会発表)

- ・丹下悠史（2018）「学習対象への自我関与を通じた子どもの価値観の形成—地域社会の問題を追究する中学校公民の授業を事例に」日本教育方法学会第54回大会
- ・Kikuchi M, Suda T, Tange Y, Murakami K, “An Analysis of student’ learning in career course with comment sheets” The World Association of Lesson Studies International Conference 2017
- ・菊池美由紀・須田昂宏・丹下悠史・村上恭子（2017）「大学のキャリア科目における学生の学びの可視化—コメントペーパーの分析を通して」日本キャリア教育学会第39回研究大会
- ・丹下悠史（2016）「学校教育における直接経験の道徳教育的機能の検討」日本教育学会第75回大会
- ・丹下悠史（2016）「読み物資料の道徳教育的効果に関する一考察：現実のモデルとしての役割に着

目して」中部教育学会第 65 回大会

- ・丹下悠史 (2015)「社会科授業における子どもの道徳的意思決定プロセスの分析」日本教育方法学会第 51 回大会
- ・Tange Y, “Deepening Analysis students learning process in Moral Education by means of ‘Transcript-Based Lesson Analysis (TBLA)’” CitizED International Conference 2015
- ・Tange Y, “Transcript-based Lesson Analysis: Pathway for Research on Student Thinking and Learning Process Focusing on Student’s Set of Values” The World Association of Lesson Studies International Conference 2014
- ・水野正朗・丹下悠史・柴田好章 (2014)「対話において差異性が重要なのはなぜか：諸概念の動的な相互関連構造の形成」日本協同教育学会第 11 回大会
- ・丹下悠史・水野正朗・田中眞帆・柴田好章・胡田裕教 (2014)「オントロジーを援用した授業分析手法の提案-複雑な対立関係にある発言間の関連構造の解明」日本教育方法学会第 50 回記念大会
- ・柴田好章・坂本篤史・須田昂宏・付洪雪・丹下悠史・副島孝・中道豊彦・水野正朗・埜寄志保 (2013)「中間項による授業の記述とデータ解析に関わる諸問題の検討」日本教育方法学会第 49 回大会
- ・Tange Y, “Moral Education in a Junior High School Social Studies Lesson: Impact of Ueda’s theory in Practice” The World Association of Lesson Studies International Conference 2013
- ・柴田好章・中島淑子・須田昂宏・埜寄志保・丹下悠史・付洪雪 (2013)「中間項を用いた授業分析における解釈の明示化」中部教育学会第 62 回大会
- ・的場正美・柴田好章・新谷裕・須田昂宏・埜寄志保・付洪雪・丹下悠史 (2012)「授業記録の解釈と概念化に関する事例研究」中部教育学会第 61 回大会

(その他)

- ・丹下悠史 (2013)「上田薫の道徳教育論についての研究ノートー『動的相対主義』に着目して」名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻『教育論叢』56, pp. 27-36.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

- | | |
|---|-----|
| ・平成 31 年度 若手研究 (新規) (研究代表者) | 申請中 |
| ・平成 31 年度 基盤研究 (B) (一般) (新規) (研究分担者) | 申請中 |
| ・平成 30 年度 愛知東邦大学 地域創造研究所 共同研究助成 (共同研究者) | 採択 |
| ・平成 29 年度 研究活動スタート支援 (新規) (研究代表者) | 不採択 |
| ・平成 29 年度 基盤研究 (B) (継続) (研究分担者) | 採択 |
| ・平成 28 年度 (公財) 教科書研究センター大学院生の教科書研究論文助成金 | 採択 |

○所属学会

中部教育学会、日本教育方法学会、日本教育学会、World Association of Lesson Study

○自己評価

論文 1 本、研究発表 1 件、科研費の新規申請代表 1 件と分担 1 件と、最低限のアウトプットは達成したが、研究の内容的進捗はほとんどなかった。次年度から授業数等の業務量が増加したため、今後はこれを基準にした研究サイクルの構築が課題である。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

学部学科、委員会、全学的業務それぞれの領域で、他の教職員から学びながら与えられた役割を

果たす。

(計画)

所属学部、委員会、その他ワーキンググループの目標に即し、授業等を通して主たるステークホルダーである学生の要望を意識しながら、積極的に運営に参加したい。

○学内委員等

教務委員会委員、中高教職課程委員会委員、教職支援センター運営委員会委員

○自己評価

主に人間健康学部における中高教職課程の運営に取り組み、一定の貢献をすることができた。上記の委員会活動に加え、学部カリキュラムの再編に参画し教育効果の向上に努めた。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

研究成果を研究職や教育職のコミュニティ、さらに市民社会において広く共有することを目指す。

(計画)

主に所属する国内、国際学会での研究発表を通して、研究により得られた知見を共有する。さらに高校の出張講義や本学の開催するコミュニティカレッジを通して地域社会への知識の還元、関心の喚起を図る。

○学会活動等

なし

○地域連携・社会貢献等

- ・2018年度教員免許更新講習講師
- ・高大連携授業開講（不開講）
- ・2018年度愛知東邦大学コミュニティカレッジ開講（不開講）

○自己評価

教員免許更新講習では必修科目「教育の最新事情」を分担し、専門的知識を生かし本学の行う教師教育の一端を担うことができた。一方で高大連携授業とATUCCは受講希望者が足りず不開講となったため、高校生や地域住民のニーズを把握し有意義な場を提案することが課題である。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

なし

VI 総括

着任2年目となり、教育活動と大学運営への貢献度は1年目より高まったと感じている。とりわけ教育面では専門とする授業研究・授業分析の方法を取り入れることで学生に充実した学習の場を用意することができた。今後は多様なレディネスの学生が前向きに学習に取り組める方策を場当たりの学術的根拠にもとづき組み立てていくことを課題とする。

ただし研究活動は昨年度に引き続き順調に進展しているとは言い難い。教育活動（とりわけ準備の面）においてICTツールの活用により省力化・効率化が行える見通しがあるので、次年度はこれを進めることでフィールドワークや他機関との研究交流の機会を増やし、持続可能な研究サイクルの構築に努めたい。

以 上